

現代社会における〈顔〉の表象
—安部公房『他人の顔』から考察する失われた〈顔〉—

人間文化課程・思想文化コース 15H1097 藤原遥平

概要

「顔」とは、他者とコミュニケーションを取る際に、重要な役割を持つものである。顔はその人がその人であることを示すシンボルになるものであり、ある人のことについて思い描くとき、まず浮かぶのはその人の顔ではないだろうか。

ではなぜ顔が人間関係において、コミュニケーションの起点となるような地位を占めているのだろうか。そこには〈顔〉という現象が立ち現われているからである。人と人の顔面を介した、何か心を引っ張られるような、特殊な現象がそこに働いているのである。

本論文では、人の相互関係の間に現れる〈顔〉という現象が一体どのようなものであり、それが人びとにどういった影響を及ぼすのかを考察していく。また、現象としての〈顔〉が、現代を生きる私たちの中で、どのような表象をなしているのかを解明する。

その手がかりとして、本稿は安部公房の『他人の顔』という作品を扱うことにする。『他人の顔』は1964年に雑誌『群像』に掲載され、同年に単行本として講談社より刊行された。

この作品で安部公房は、「顔を失った」人間を描いた。それは作中の「ぼく」だけでなく、都市生活者すべてを指している。それは人びとが陥ってしまった「疎外」の状態だということ。顔を失ってしまったとはどういう状態なのだろうか。そしてそれに伴う「疎外」とは何か。またそれらの考察を、21世紀を生きる私たちの社会へと応用することで、現象としての〈顔〉の表象へと迫る。

第1章では、安部公房『他人の顔』の「ぼく」が、「顔」という概念について、どのように考え、変化していくのかを読み解いていく。

『他人の顔』についての研究の中に、「自己疎外」という言葉を用いた自己疎外論を唱えたものが多くある。この疎外という言葉は、戦後の高度成長期の社会で使われるようになった。資本主義社会の到来で、社会集団の形態も大きく変化し、その中でつながりも機械的なものへとなったのである。それにより、自己がどのようにして存在しているのか、という本質が見失われてしまう状態に陥る。それが自己疎外の状態であるという。

顔とは自身の人格が表出する部位である。倫理学者の鷺田清一は、人は自身の顔へ、他者の顔をまなざすことによって、間接的にしか近づくことが出来ないと述べている。また、哲学者のサルトルは他者にみられることで自分を一つの存在として凝固するものだと述べる。作中の「ぼく」は顔を失っており、他者から見られることができないため、自分で自分の顔を知ることができず、存在の凝固が不可能となっている。つまり、彼は自己疎外の状態に陥っているといえる。

「ぼく」は日常生活において、顔が人と人をつなぐ通路のような役割をもつと考え、そ

れゆえ顔がどれほど人間関係で重要であることを認識していた。「ぼく」は自己疎外から脱却するため、仮面の製作に取り掛かる。

仮面は、見る/見られることによる顔の相互関係から脱することを可能にし、顔にとらわれず動き回る全能感をもたらすことを「ぼく」は発見する。しかし同時に、自己の同一性を揺るがしうる危険性ももつ。

「ぼく」は現代社会について、「隣人と、敵とが、もはや昔のように、誰の目にも容易に見分けがつくはっきりとした境界線で区別されなくなってしまった」と述べ、現代人は孤独と共にあるとした。曖昧になった人間関係の中で、自ら通路である顔を遮断するようになったのである。そして「顔の喪失という、ぼくの運命自体が、すこしも例外的なことではなく、むしろ現代人に共通した運命だったのではあるまいか」と考え、自分だけではなく、現代人すべてが顔を喪失した状態であると結論付けたのであった。

現代社会において「顔」という概念は、〈素顔〉(＝ありのままの顔)と〈仮面〉(＝偽りの顔)という対比的な構造で解釈されており、それによって社会は人びとを統制している。しかし「ぼく」は〈素顔〉も、裏に読み取られうる内面を隠しているという点で、〈素顔〉も〈仮面〉であるということを見抜く。「ぼく」は仮面によって「顔」の二項対立の構造で管理された社会のもろさを発見したが、しかし同時に仮面によって自己が揺らぎ、「顔」の二項対立に閉じ込められていた。

第2章では、現象としての〈顔〉が一体どういうものであるかを明らかにする。〈顔〉とは顔面を介した一つの現象であり、だれかがそばにいるという感覚や、何かの呼びかけ、または訴えを自分に引き起こす。そしてその力によって、私とは何かという問題と向き合わざるを得ない場所へ召喚されるのである。

自分の存在は、相手が自分を見、そしてそれを見ることでしか近づくことができない。つまり〈顔〉という現象は、他者を介した微妙な関係の中で起こる現象である。

人は〈顔〉から情報を得ようとする。しかし〈顔〉から読み取れず曖昧な状態になってしまうと、そこに何か予測しえないことが起こるのではないかという不安が生じる。その相互理解の不可能性が、疎外を作り出すのである。それは人びとを社会の一員として構成し、管理する際に支障をもたらしかねない。そこで社会は「顔」の規範を作り出す。社会を構成するための、解釈のできる顔を要求する。つまり社会集団の役割を担う〈仮面〉を強調するのである。例えば、化粧は一つの規範といえる。

しかし〈顔〉は本来、規範を通して目に見えるものではない。それは〈顔〉という現象を抑圧してしまうものである。〈顔〉とは痕跡としてでしか認識できない。その現象は自身を強制的に他者の前に引きずり出す。自身の〈顔〉を知るということは、他者の前に引きずり出され、責任を負う時の「私はだれか」という問いと試行錯誤の、発生のプロセスなのである。〈顔〉という現象は、自己を知るという喜びと、否応なく他者の前に召喚される苦痛を伴う。

物質的な仮面は、〈顔〉によって引きずられることによる苦痛の回避を可能にする。しか

し、前述したように自己存在を不安定にさせる力をもつ。自分と仮面をかぶった自分の中で〈顔〉が立ち現われ、自家撞着に陥らせるかのような状態になるのである。

第3章では、前章で考察した〈顔〉という現象を、作品中の現代社会にあたる高度経済成長期にあてはめ、人びとがどのように〈顔〉を喪失したのかを見ていく。

日本は高度経済成長期を迎え、社会形態が大きく変化した。戦後の復興と経済的な豊かさへの希求が、人びとの役割的側面を要求したのである。以前までの共同体は解体され、人間関係は曖昧なものとなった。このような流れの中で疎外は生まれたのであった。

そのような社会において、〈素顔〉と〈仮面〉という二項対立の「顔」の観念が要求される。社会の歯車のような役割が人びとに求められたため、その二つのうち〈仮面〉(にせものの顔)による、機械的で役割的な共同体が望まれた。そのような共同体のほうが、社会にとって管理しやすいからである。

『他人の顔』の「ぼく」は、すべての現代人が「魂の顔を失っている」とした。それは、人と人の間に〈顔〉が立ち現われなくなってしまったということである。〈素顔〉と〈仮面〉のうち、〈仮面〉が前面に出てくるようになったことで、〈素顔〉の読み取りが困難になった。それによって、他者が認識不可能な不気味な存在へと変わっていったのである。つまり、他者との〈顔〉を介した自己の認識ができない。「魂の顔」は〈顔〉が浮かび上がるような顔であり、そしてその喪失は、自己疎外に陥っているということを意味する。

現代社会の人びとは、誰もが「魂の顔」を失っている状態であり、かつ、それは自分一人だけが犯した罪のように感じているという。人びとは自己疎外の状態にある。

第4章では、前章の高度経済成長期の社会の疎外の問題をふまえ、私たちが暮らしている現在の社会に視点をあてる。社会の構造はどのように変化し、そして〈顔〉と疎外の問題はどうなっているのかを考察する。

現代社会は、大きく時代が転換するほどの変化が起きているといえる。その担い手となった出来事の一つは、20世紀後半に起きたIT(情報通信技術)革命である。現在、人びとの生活の中で、インターネットは当たり前ものとなり、社会を構成する中心となっている。

インターネットが広く生活に浸透したということは、社会が人びとを監視することがより容易になったということである。そのような監視社会は、さらに人びとに〈仮面〉を要求するものとなった。〈素顔〉より〈仮面〉が重要であるという観念が、前章での社会よりも濃くなったといえる。

やはり20世紀の現代社会でも、人びとは「魂の顔」を喪失した状態であり、自己疎外の問題に陥っているのである。

インターネットの普及によって、人びとの間接的なコミュニケーションが可能になった。インターネット上では、多種多様な自己表現、交流の場があり、現在ではSNSと呼ばれるインターネットサービスが特に力をもっている。

この間接的なコミュニティを生み出すインターネットは、「仮面」の役割を担っていると考えられるのではないだろうか。インターネット上の仮想空間では、社会から押し付けら

れた役割から逃れ、「誰でもない存在」になることができる。そこに〈顔〉の相互関係は必要ない。その仮面は人びとに全能感を与える。しかし、実際の仮面と同じように、インターネットの仮面も自分と仮面をつけた自分の間にズレを生じさせ、自家撞着のような状態を引き起こす危険性を孕んでいるのである。

自己疎外の状態にある現代の人びとは、インターネットという仮面を装着して、『他人の顔』の「ぼく」の仮面劇を体験している。仮面によって他者との通路を回復しようとするが、「ぼく」と同じように、仮面の力に翻弄されるのである。

このような〈顔〉の喪失と疎外の問題について、安部公房は現代の人間関係から生まれる孤独を受け入れ、他者と直接的なコミュニケーションを取ろうとすること必要だと述べている。〈顔〉は痛みなくしては現れない現象だ。自己疎外からの回復は、その痛みを引き受ける覚悟が必要なのである。

今求められているのは、直接的コミュニケーションによる、孤独の共有である。相手の視線をとらえ、相手をまなざす。その「顔」が、〈素顔〉か〈仮面〉か、わからずとも、相手の面からどんな記号が読みとれるのか、何を隠そうとしているのか、ということ意識することが重要なのではないか。そうすることで、両者の間に〈顔〉は現れ、そして痕跡を残すのではないだろうか。

参考文献

- ・安部公房『砂の女』（新潮社、1962年）
- ・安部公房『他人の顔』（新潮社、1964年）
- ・安部公房『燃え尽きた地図』（新潮社、1967年）
- ・安部公房『箱男』（新潮社、1973年）
- ・太田草子「安部公房研究：『他人の顔』『箱男』における自己と他者」（『日本文学』（114）pp.103-123、2018年）
- ・岡本裕一郎『いま世界の哲学者が考えていること』（ダイヤモンド社、2016年）
- ・片野智子「安部公房『他人の顔』論：自己疎外と加工された顔」（『学習院大学人文科学論集』（24）、pp.155-185、2015年）
- ・貴戸理恵『「コミュ障」の社会学』（青土社、2018年）
- ・砂子岳彦・福田鈴子「仮想空間における「分身」と自己調和ーラカンのシェーマLとアバター」（『常葉大学経営学部紀要』（6）、1号、pp.1-8、2018年）
- ・田中裕之『「他人の顔」論——その構想と形象』（『梅花女子大学文学部紀要、国語・国文学篇』（29）、pp.33-50、1995年）
- ・田中裕之『安部公房文学の研究』（和泉書院、2012年）
- ・中野収『メディア人間ーコミュニケーション革命の構造』（勁草書房、1997年）
- ・波瀾剛「安部公房の『他人の顔』論ー文章構成の形態とテーマをめぐってー」（『文学研究論集』（13）、pp.106-126、1996年）

- ・西兼志『〈顔〉のメディア論-メディアの相貌』（法政大学出版局、2016年）
- ・三溝信「現代社会と疎外論-疎外論と社会学（1）-」（『社会労働研究』（13）、2号、pp.25-49、1966年）
- ・鷺田清一『顔の現象学——見られることの権利』（講談社学術文庫、1998年）
- ・和辻哲郎『面とペルソナ』（岩波書店、1937年）
- ・E・レヴィナス著、熊野純彦訳『全体性と無限（上）』（岩波文庫 2005年）
- ・R・リルケ著、望月市恵訳『マルテの手記』（岩波書店、1973年）